

書評

Book Review

**Yoshiaki Furui, *Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature***

貞廣真紀

SADAHIRO Maki

日本のアメリカ文学研究者が英語で研究書を出版すること——おそらく、それは単に読者のターゲットを日本語使用者から英語使用者へと拡張することだけを意味するのではないだろう。それは、アメリカ文学を日本でどのように学ぶのか、そして、批評の流行も文学の政治的位置づけも異なるアメリカの大学のディシプリンとしての「アメリカ文学研究」とどのように関わるのか、いわば「読むこと」の問いと分かちがたく結びついている。日本の研究者によって多くの論文が英語で書かれ、英語雑誌に掲載されることが珍しいことではなくなったとはいえ、アメリカの大学出版会から著作を出版することが未だ一般的ではない状況下であって、古井義昭氏による *Modernizing Solitude* (2019) の出版は日本におけるアメリカ文学研究のあり方に一石を投じる出来事であったように思う。

*Modernizing Solitude* は、19 世紀中葉から世紀転換期にかけてアメリカで加速したコミュニケーション革命が「近代的孤独」(modern solitude) の概念形成にどのように影響したのかを論じた研究である。古井氏は、郵便網の敷設、テレグラフやスチームエンジンの発明、印刷技術の革新など、様々なコミュニケーションメディアの発達が時空間を再編成し、人々の関係性を強化したことに触れ、同時にそれが(一見、逆説的にも)関係網から疎外されることに対する不安や孤独の感覚を惹起したと指摘する [3]。そして、コミュニケーション革命が過渡期にあった 19 世紀、新たなテクノロジーの

恩恵を享受しながらも未だそれが心理的に受け入れられていない状況下において、作家たちが「不快な感情」としての「ロンリネス」(loneliness)を「自ら選んだポジティブな状態」としての「ソリテュード」(solitude)に変換する過程を詳述していく [5, 7]。

本書はエモリー大学の博士号請求論文が元になっていることもあり、「一貫したテーマで複数作家を論じる」という近年のアメリカの博士論文の一般的な構成を踏襲しているのだが、同時に、自己言及的にそのテーマを構成原理にしているようなところがある。各章ではそれぞれヘンリー・デイヴィッド・ソロー、ハリエット・ジェイコブズ、ハーマン・メルヴィル、エミリー・ディキンソン、ヘンリー・ジェイムズが扱われるが、こうした「孤独」な作家たちは、『白鯨』(Moby-Dick, 1851)におけるピーコド号の「孤島のような船乗りたち」(Isolatoes)のごとく、それぞれ独立し完結した存在でありながら、本書に併置されることで孤独の連続体を構成する。そのとき、読者もまた孤独の読書空間の中で孤独な作家たちに向かい合い、孤独でありながらつながっているという「不純な孤独」の共同体に連なる——本書はそのような文学体験を可能にしてくれる。

しかし、完成度の高い独立した章が構成する「孤独の共同体」の文学的自己言及性は、本書の構成原理の片面にすぎない。古今東西、おそらく誰もが抱えてきたであろう孤独の体験を扱うにあたり、古井氏は分析対象の時期と場所を限定し、彼らのメディアとの関わりに着目することで、その歴史化を試みる。古井氏が描く俯瞰図はこのようなものだ。メディアの社会への浸透段階において、それは「ソリテュード」の形成を可能にしたが、19世紀後半、「つながること」が常態になると、メディアを通じた遠隔の共同体への没入はむしろ「現実」からの離反を引き起こし、そこにロンリネスが生まれることになる [23]。孤独のゆるやかな質的变化、ひいては孤独の通史が本書の重要な構成原理であるとすれば、それがどこまで説得力を持って読者に訴えるかを問う必要があるだろう。

たとえば、逃亡奴隷だったハリエット・ジェイコブズの『ある奴隷少女に起こった出来事』を扱った第2章はどうか。本章では、彼女を性的搾取の対象へと貶める支配の道具であった「読み書きの能力」を、ジェイコブズが雑

誌や新聞メディアに積極的に関わることで武器に変え、屋根裏という隔離空間のロンリネスを「エンパワリングな孤独」へと転換していく様子が記述されている [51]。本章では、白人読者とのコミュニケーションを求めて作家ジェイコブズが戦い続けなければならなかった事情も十分に論じられており、独立した章として見れば、その議論になら不足があるようには思われない。しかし、彼女の孤独を、孤独の変遷史に位置づけようとするとき、たとえその孤独がジェイコブズ本人にとって「避難所」という「肯定的」側面を持っていたにせよ、奴隷制度が生み出した隔離状況を「歴史的な意味で」肯定的状況として位置づけることの問題は無視できないだろう。

ジェイコブズの孤独を「ソリテュード」の代表例として取り上げることの問題は、さらに、本書で扱われる他のキャノニカルな作家たちが例外的なのか範例的なのかという問題に接続する。たとえばハーマン・メルヴィルの「バートルビー」を扱った第3章を見てみよう。古井氏はまずコミュニケーションの失敗を意味する「デッドレター」（配達不能郵便）というモチーフが、メルヴィルの発明というよりむしろ、郵便制度が一般化するにつれて増幅した「手紙が配達されない」ことへの不安を体現する「デッドレターの文化」（“culture of dead letters”）から生み出されたと指摘する [70]。（この指摘がメルヴィル研究への大きな貢献であることは強調してしすぎることはない。）その上で、メルヴィルが独自の想像力によって、「デッドレターの文化」ひいては市場経済を支えるコミュニケーション革命から距離を置き、それに積極的に抵抗する「障害」としてバートルビーを造形していると議論を進めるのだが [81]、もしバートルビーが特殊で例外的な存在なら、それがどのように19世紀の孤独の歴史の主流たりうるのかという問いが自ずと生まれることになる。あるいは、もし、バートルビーひいてはメルヴィルが「例外的であり、それこそが範例的である」というレトリックが本書の底流にあるとすれば、その評価軸には作品そのものよりむしろ、アメリカの例外主義言説や、20世紀以降とりわけ冷戦期に確立されたアメリカ文学のキャンオン形成の問題が関わるようにも思えてくる。

さらに、例外と範例をめぐる第3章の問題を複雑にするのは、古井氏が例外的要素として取り上げたメルヴィルの同時代時間からの逸脱が、しばしば

非常に範例的にも見えるということだ。「デッドレター文化」とは、一般化すれば、資本主義やコミュニケーション革命の内部にそこから逸脱する力が胚胎することを指すのだが、バトルビーの時間的逸脱もまた、その文化の内側から生み出されたものなのではないか。19世紀は急速な近代化の中でエジプトロジーや建築における古典主義の復興、中世回帰運動など、反近代のモードを生み出した時代でもあった。バトルビーが古代ローマやエジプトといった過去のイメージをまとふことがこの系譜に連なるとすれば、古井氏が指摘するバトルビーの同時代からの「逸脱」は例外的であるように見えて実は範例的であることになる。もし、作品がそれ自体として完成体であるならば例外も範例も問題にはならない。しかしそれが出来事の関係によって成り立つ歴史であるとすれば、その布置に関して、より慎重な手続きが求められるのではないか。

文学研究は歴史研究とどこまで重なりうるのか——その問題をさらに先鋭化するのが第5章の布置である。それまでの章がプリントメディアや手紙を扱うのに対し、この章は19世紀後半におけるテレグラフの普及に着目する。(テレグラフ・オペレーターを主人公とした大衆ロマンス小説についての本章の充実した議論は、山口ヨシ子氏の『ワーキングガールのアメリカ』(2015)を合わせて読むと、その面白さをいっそう感じることができる。)古井氏はこうした大衆小説と併置してヘンリー・ジェームズの「檻の中」を取り上げ、それをテレグラフ・ロマンスの階級越境の幻想やテクノユートピアのビジョンを打ち砕く作品として位置づける。その結論として本章は、メディアへの没入が「現実」との乖離を引き起こすことで生まれる孤独の発生を指摘するのだが、本章の充実した議論が読者に示してきたのは、そのことよりむしろコミュニケーション革命に接する人々の階級格差の問題ではなかっただろうか。第4章で扱ったディキンソンが「スロー・メディア」としての手紙にこだわることができたのは、彼女が職業作家ではなく、テレグラフを使う可能性を維持しつつも距離を取ることが可能な階級に属していたことが前提にあるわけだが、第5章に登場する労働者階級のオペレーターたちはメディアネットワークに不可避的に組み込まれながらも、そこから排除された存在である。このことを念頭におくとき、本章で結論される孤独の質の

違いが果たして時代的变化の結果なのか、それともメディアに対するアクセス権の階級格差の問題なのかは実はそれほど明確ではない。

ここまで論じてきたように、本書の歴史観に対する疑問は決して少なくない。しかし、逆説的に聞こえることを覚悟で言えば、それは本書の瑕疵ではない。なぜなら、もし第2章がなければ、あるいは第4章が第5章と併置されることがなければ、メディアへのアクセスが人種、性別、階級といった諸要素によって条件づけられていたという事実が覆い隠されてしまっただろう。また、第5章が浮き彫りにする「孤独の歴史化」の問題は、「メディア受容の歴史化」の必要から生み出されたものであり、それなしに古井氏のメディア文化論は間違いなく不完全な状態に止まっていたはずだ。たとえそれが問題を多く含むものであれ、文学の歴史化がいかにして可能か、その難題に向き合い続けた古井氏の姿勢は評価されることはあっても批判されるべきものではない。

精読に裏打ちされた小説研究を積み重ねることで歴史を語ることはできるのか。研究論文そのものが有機的な完成体であり一つの文学であってほしいという願望と、文学の歴史化に対する意志——本書が示す文学研究の二重の意識は、同時に、日本におけるアメリカ文学研究の精読の伝統と、現在のアメリカにおけるアメリカ文学研究の趨勢との相克を映し出していると言えるかもしれない。その相克の中に幻視されるのは日本におけるアメリカ文学研究の過去と現在であり、その中にこそ、日本のアメリカ文学研究者は自らの研究の未来を模索することになるのではないだろうか。

Furui, Yoshiaki. 2019. *Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature*. Tuscaloosa: The University of Alabama Press.